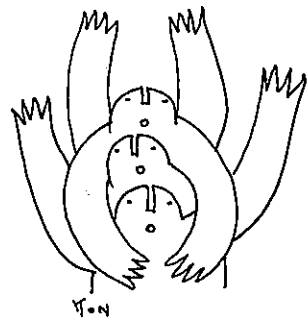


子どもの意欲を引き出す「コーチング」

自立した子どもを育てるには…

神谷和宏

愛知県刈谷市立刈谷南中学校教諭



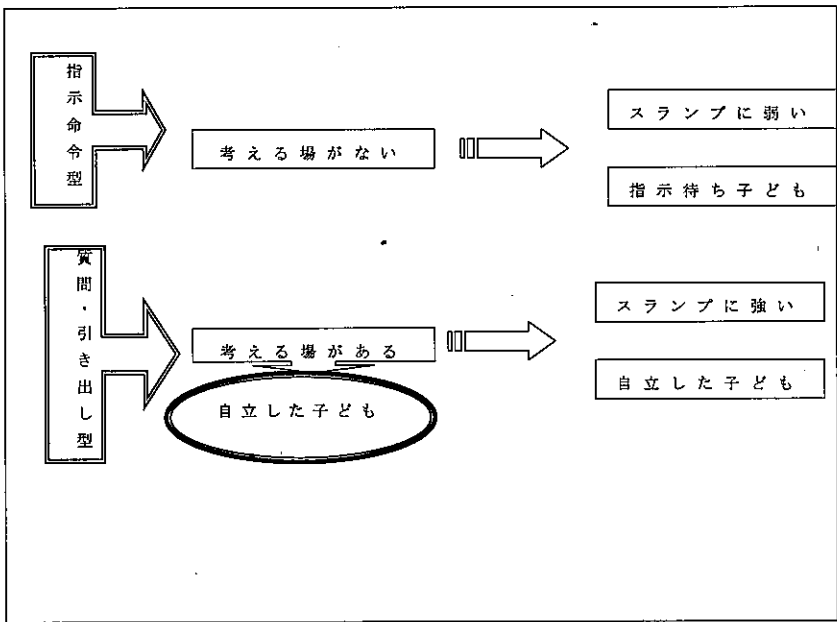
コーチングとは

今、教育の世界でコーチングが大きく取り上げられています。

このコーチングというのは、ビジネスの世界で

は十年以上も前から取り入れられている考え方で、日本でもコーチングの考え方を有名にした人は、日産自動車CEOのカルロス・ゴーン氏や中日ドラゴンズの落合博満監督です。

ビジネスの世界では上司が部下を育成する際に、従来の「指示命令型」の指導法からコーチングの



「質問・引き出し型」の指導法に変化してきています。そして、スポーツや教育の世界でもコーチングがクローズアップされています。例えば、野球を例にすると、以前は「もっと素振りをコンパクトにしろ!」とか「脇を締めろ!」といった「指示命令型」の指導法が中心でした。しかし、現在のコーチは「今、あなたの視線はどこにありますか?」とか「腕の位置はどうなっていましたか?」といったように、質問を選手に投げかけています。その結果「指示命令型」で育てられた選手よりも「質問・引き出し型」で育てられた選手の方がスランプに陥ったときに圧倒的に立ち直ることが早いという結果が出ています。どうしてでしょうか?

それは「考える場」があるかどうかの違いからきています。人の意識というものは、質問をされると、その答えを探し考え始めます。「質問・引き出し型」で育てられた選手は、考える場が与えられています。したがってスランプに陥りにくい

し、たとえスランプに陥っても自力で立ち直ることができるとです。反対に「指示命令型」で育てられた選手は、好調なときは成果を發揮しますが、一旦歯車が狂い始めると、的確な指示をもらわないと自分では立ち直りにくいものです。常に指導者の指示通りに行動しているので、自分で考える習慣がないからです。

自立した子どもを育成する

学校では「子どもの意欲を喚起する」とか「自発的な子どもを育てる」ことが言われています。これは、自分で課題を見つけ、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決できる子どもであり、言い換えるなら自立した子どもを育てることです。

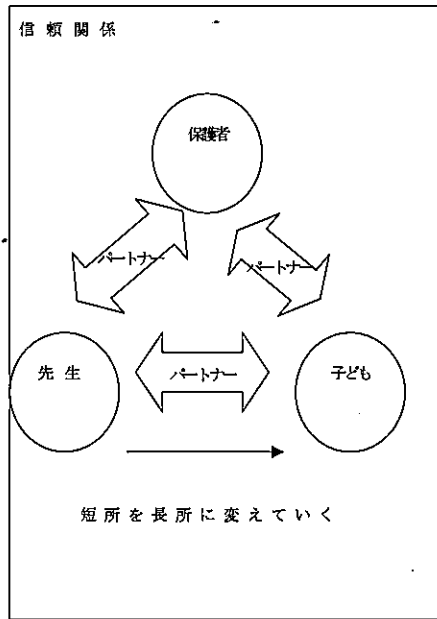
自立した子どもを育てるには「指示命令型」の指導ではなかなか困難です。この指導では、「言われたことだけをやる（言い換えると、言われな

いと動かない）」という依存した子どもになります。そこで、この自立した子どもを育てる有効な手段の一つとしてコーチングがあるのです。

コーチングが、最終的に目標としているものは「自らが本来もっている能力や可能性を最大限に發揮すること」です。コーチングは、人の持つ可能性を引き出す指導を誰でも実践できるように体系化したものだといえます。

学校に、コーチングが必要なのか

学校は、子ども、保護者、先生の円滑なコミュニケーションで構成されています。このコミュニケーションは、学校（学年・学級）経営でも、授業経営でも、クラブ活動経営でも最も基本になります。そして、先生・子ども・保護者の信頼関係の上に成り立っています。言い換えると、先生は子どもや保護者のよきパートナー（味方）になれるかどうか重要です。子どもが授業で「学習内



容が難しいけれど、先生が好きだから、しっかりとやる」ということがよくあります。これは、信頼が人間関係にとって重要なことであることを物語っています。

自己イメージを高める

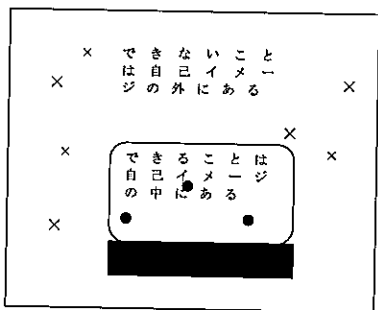
私が幼かったころ「将来なりたいものは何です

か？」と聞かれると、ほとんどの人が「野球選手」とか「総理大臣」「スチュワーデス」など、何かしら夢のある答えをしたものです。しかし、同じ質問を最近の子どもにすると「サラリーマン」とか「公務員」「特にならない」などと現実味を帯びているものが多く見受けられます。なぜでしょう？さまざま原因が考えられますが、その一つの答えは、子どもたちの自己イメージの低さにあると思います。また、以前なら非行少年やいわゆるツッパリと呼ばれる子どもも多かったのですが、最近では姿を変えて無気力な子どもが増えています。例えば、駅やコンビニの前で座り込んで、深夜までおしゃべりをしたり、声をかけると「うっせーな」と煙たがる中高生も増えてきました。学校の授業でも、小学校のうちには挙手も多いが、中学生になると急に挙手が減り、発言が少なくなってしまう。これらには「間違えたら恥ずかしい」「正解以外は答えられない」などという強迫観念があるのでしょうか。これも、多くの場合、

自己イメージの低さが原因になっている場合があります。
ります。

自己イメージとは

自己イメージとは「自分が潜在意識の中にもっている『できる』というイメージ」のことです。自己イメージを高くもつとは「自分を好きになり、自分の価値を認め、ありのままの自分であること、心地よく感じる」ということです。人は物事ができるかできないかの判断基準を、この自己イメージで判定します。「できる行動」は、この自己イメージの中にあり「できない行動」は、この自己イメージの外にあります。自己イメージの中にあることに対しては「き



っとできるだろう」「ちょっと頑張ればできるだろう」と考え行動します。しかし、この自己イメージの外にあることは行動を渋ります。「きっとできないだろう」「自分には無理だろう」と考えるからです。つまり、やってみたいと思えず行動がストップします。

自己イメージが狭いということは、できると思う範囲が狭いということです。本人がもっている自己イメージには範囲があります。しかし、目標がその範囲の外にあると、できる気がしません。つまり、「やれそうにない」↓「無理だ」↓「やめよう」という図式が成り立ちます。そこで、子どもの意欲を図る重要な要素は、この自己イメージを広げ、できるという自己イメージの中に目標を取り込むことです。

自己イメージを拡大するには

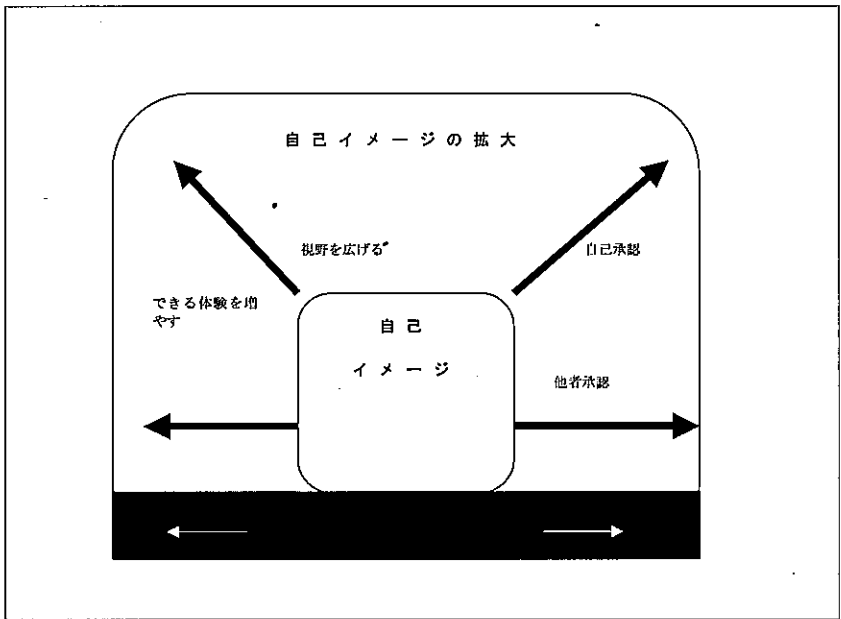
自己イメージは、生活経験に基づいて形成され

ています。自己イメージの小さい子どもは、往々にして幼少期に周囲からの「承認」の経験が少なかったといえるでしょう。つまり、褒められたり認められたりすることが少なかったのです。そこで、自己イメージを高めるには、まず褒めたり承認したりすればいいのです。小学校の低学年くらいまでは、親や先生がどんどんほめてあげればよいのですが、だんだん大きくなると自己イメージは高まりにくくなります。

自己イメージの下には、それを下支えしている存在価値があります。そして、その存在価値そのものを大きくしてあげることで、自己イメージも膨らむのです。

存在価値を高めるには

それには、次の三つがあります。
他者承認
自己承認



視野を広げる

承認とは、ありのままの子どもを認める（褒める）ことです。先生は、特別なことだけでなく、普段の当たり前のことにも目を向けて褒めてあげましょう。（他者承認）また、自我が芽生えてきた中高生には、自分で自分を褒めることも大切です。（自己承認）そのためには、小さな成功をどんどんさせ、「やればできる」という自信を植え付けてください。視野を広げるには「立場を変える」「情報を集める」「体験をする」ことです。積極的に社会参加させ、いろいろな立場を理解させることが大切です。

参考文献

「先生のためのコーチングハンドブック」（明治図書） 神谷和宏

「教師のほめ方叱り方コーチング」（学陽書房） 神谷和宏

告知板

●魅力的な園や施設にするための、魅力的なリーダー育成プログラム「第5回リーダーズワークショップ」自分と向き合うエクササイズ」（東京）

▼日時 6月9日（土）午後1時～7時 ▼講師 団士郎（立命館大学大学院応用人間科学研究科教授・家族心理臨床家） ▼会場 東京・新宿住友ビル47F・スカイルーム（JR線ほか「新宿」駅西口徒歩8分、大江戸線「都庁前」駅A6出口直上、丸ノ内線「西新宿」駅徒歩3分） ▼対象 幼稚園・保育園や施設などの先生、職員、施設長 ▼費用 個人参加1万円、施設参加登録のうえ参加8000円（施設単位の参加は初回のみ別途、年間登録料3000円） ▼プログラムの目的 ①ヒューマンサービスを提供する立場にある先生や施設職員の方を対象として、自らを取り巻く「家族」を振り返る事であらためてヒューマンサービスのあり方に立ち返り、「自己発見」や「気づき」の中で、個として成長し、魅力ある職員を育成していく ▼問い合わせ・申込み アンブロック株式会社・安井さん（〒107・0062 東京都港区南青山2・14・7） ☎03・5775・1612 FAX 03・5775・1613 ホームページ www.asoblock.net